

江戸語の位相—遊里語・武士詞

チョールナヤ・アンナ

1. はじめに

江戸時代は、国語史上、宝暦・享保年間（1751～1772）頃を境にして、前期と後期に分けられる。前期は、西部方言に属する上方語が優勢であるが、江戸幕府の開府によって文化・文政の中心が上方から江戸に移り代わった結果、東北語を基盤とした江戸語が成立し、後期は、江戸語が優勢になったと言われている。

さて、当時の社会は、士農工商という身分制度によって整然と区分されていた。また、地域と階層には密接な関係があった。例えば、武士階層のうち旗本は東海地方や甲斐の出身者が多く、町人のうち商人層は上方出身、職人労働者層には関東出身が多かったとされる。江戸に関して言えば、山の手に武士、下町に商工業者が集住し、それぞれ固有の生活様式で生活した。その結果、言葉も階層に応じたものが形成されてきたと考えられる。

このように、江戸語においては、身分や階層の違い、職種の違いにより、用いられる語彙にかなりの差異があった。さらに、言葉の使い手と男女差が関連したものには、男性使用の武士詞、女性使用の遊里語などがあり、これらは江戸語の特色の一つと言える。

本発表では、江戸時代後期の話し言葉の姿を留める洒落本や歌舞伎脚本を言語資料として取り上げ、その中で使用されている遊里語と武士詞に注目する。階層や男女の差異が言葉にどのように反映しているのだろうか。

2. 本発表の目的

武家詞と遊里語の従来の研究成果をふまえ、本発表では以下の研究課題を設ける。

課題1 遊里語の定義、それが表わす意味・機能・用法について報告。

課題2 武家詞の定義、意味・機能・用法について報告。

課題3 課題1と課題2を総合し、江戸語の位相についてまとめる。

3. 用例採集資料について

用例は以下の作品から採集した。いずれもの作品も会話文が多く当時の話し言葉が反映されている。

- ・山東京伝（1790）『傾城買四十八手』（洒落本）

- ・山東京伝（1791）『錦之裏』（洒落本）
- ・十返舎一九（1802～1809）『東海道中膝栗毛』（滑稽本）
- ・並木五瓶（1794初演）『五大力恋緘』（歌舞伎脚本）

4. 遊里語についての調査結果

江戸時代の女性語として知られたものとしては女房詞がある。女房詞は、元々は、教養があり上層階級にある女性によって使われたが、次第に下層の女性にも使われるようになり一般化の傾向が見られた。

一方、ここで扱う遊里語は、主として江戸時代の遊女によって使われた特徴的な言葉である。遊女とは、郭という特定地域に居住を制限され、地域外の男性を接客する職業に従事する女性であり、遊女が用いる言葉、すなわち遊里語は、岡場所において春を売る私娼の独特の行動様式・生活様式から生じたものである。他に「郭ことば」「里ことば」などの名でも呼ばれる。

さて、この遊里語は、江戸時代はじめに京都島原で使われ出し、やがて大阪新町、江戸吉原に伝わった。また、各遊里特有の表現も生まれ、岡場所にも伝播するなどして幕末まで使われてきたとされる。それでは、遊里語にはどのような語彙が存在していたのだろうか。また、それはどのような役割を有していたのだろうか。

4.1. 待遇表現としての遊里語

遊里語の出現を説明する際には、しばしば「造られた語」や「造語」といった表現が用いられる。それは、遊里語が、全国から集められた遊女の訛りをカバーするという接客上の必要性和、遊郭という特殊なコミュニティにおける連携を保つという意図によって発生したことによる。

その遊里語において最も重視されたのは、客をもてなす為に用いる高い敬意を表す言葉、すなわち待遇表現に関わる表現である。以下の用例には、待遇に関わる言葉がいくつか見られる。

- ・禿「なんざんすへ」女郎「さつき言ひ付けた事を忘れてくれめへヨ」禿「モウそう申しいたヨ」
（『傾城買四十八手』一五237）

- ・客・息子「おめへの色をちつと咄してきかせナ」女

郎「どふしてそんな事がござんすものか、わつちや去年まで三輪の寮にゐんして此春からでんしたヨ」
(同239)

- ・女郎「あしかのさん、今朝の物菜はなんだ」新造「たしか芋に油揚でござりイすヨ」(略)
女郎「おそれるね」傍輩女郎「あやまりいす」
(『錦之裏』一六67)

- ・客「そのよふにいやがるものをべんべんと来たはおれが罪だつけよ」女郎「そのよふにおつせいす程、なぜあのよふな気であつたと思へば、いつそ死にとふおつす。今迄が今迄だからどふで承知はしなすめへ」
(『傾城買四十八手』一五237)

ここで、上記の遊里語について待遇表現の観点から分類してみると、「丁寧語」に属するものと「尊敬語」に属するものに分けることができる。

丁寧語：「マス」の意に当たるもの(イス・エス・ス・ンス)
→「申しいしたヨ」「あやまりいす」「寮にゐんして」「此春からでんしたヨ」
「ゴザイマス」の意に当たるもの(オザイマス・オザリンス・オザンス・オスなど)
→「なんざんす」「そんな事がござんす」「芋に油揚でござりイすヨ」「死にとふおつす」。

尊敬語：「ナサル」の意に当たるもの：(ナイマス・ナマス・ナンス)
→「承知はしなすめへ」
「オッシュアル」の意に当たるもの(オッセイス・オッセエス・オッセンス)
→「そのよふにおつせいす程」の類である。

以上の遊女独特の待遇表現は、特に「ありんす言葉」「いんす言葉」と呼ばれ、遊里語を代表させるものとして位置づけられている。なお、「アリス」の「ンス」は「マス」の訛りである。

4.2. 隠語としての遊里語

お客を前にしながら遊女同士で連絡を取り合うために生まれた隠語も、遊里語の一種として考えられている。また、遊里という特殊な風俗・環境から生まれた術語的な語彙も遊里語としてとらえることができる。明和5年(1768年)に飯袋子が著した随筆集『麓の色』より、隠語・術語の例を挙げる。

- ・しんござ(武士)・むかふの人(質屋)・水上げ・揚げる(女郎を揚げる)・お茶をひく(廓に残りたる女郎はお茶を挽くといふ)・訳(恋のいきさつ)・横に行く(客のある遊女が他の座敷へ出ること)・手がある=手管(遊女が客をあやつる駆引のてぎわ)...

遊里独自の風俗やしきたりなどに伴う語彙も少ない。

- ・道中(遊女がある一定の日に盛装して廓内を練り歩くこと)・初回(遊女との初会)・裏(初会の時と同じ遊女を2回目に揚げること)・なじみ(同じ遊女のもとの通い馴れた客)

遊女の格付けを示す語については次のようなものがある。

- ・^{たゆう}太夫(たゆう)(最上位の遊女)・^{こうし ちゅうきん}格子・^{ちゅうきん}昼三・新造(女郎)

以上が女性専用の言葉として発生し、使われてきた遊里語についての調査結果である。続いて、男性に限って使用された言葉である武家詞について紹介する。

5. 武士詞についての調査結果

江戸時代において武士は所有する領地の農工商に対して絶対的な政治力を持ち、武家で使われている言葉も町人層や農民層のそれとは異なっていた。武士詞の別名として「家中語」「御家中ことば」「武家詞」がある。以下、町人と武士との会話をみてみよう。

- ・弥二「…私も夜前^{やまえ とまり}の泊で、ごまの灰に取つかれて、大きに難義をいたします。」
侍「ハアそれは近頃きのどくじゃ。なるほどごまの灰のさしたのはいたかるふ」
北八「イヤごまの灰と申すは、どろぼうのことでござります」
侍「どろぼうとは何じゃ。」
北八「ハイ、泥坊と申は、盗賊のことでござります」
侍「ハアアなにか、人のものを取よる、盗賊のことを、どろぼうといふか」
弥二「さやうでござります」
侍「ソノ又どろぼうをごまの灰といふじゃナ。なるほど解^げせたへ」(『東海道中膝栗毛』二編上)

本例では、「ごまの灰」・「泥坊」という町人の言葉

が侍には通じず、「盗賊」と言って初めて理解されたことが描写されている。ここに武士は特殊の言葉（および感じ方・考え方）を持ち、江戸語の語彙には身分の差が反映していることがわかる。

また、他に武士詞と言われるものにはどのような言葉があったのだろうか。「五大力恋緘」から例を示す。

- ・宅左「先ほどからよほどの長座、拙者は最早お暇申ませう。」源五「折角お越し下されしに、よからぬ事をお聞かせ申し、気の独千万に存じます。略。」源五「然らば、もうお帰りでござるか。」宅左「近日またお尋ね申さう。」（→武士、116）
- ・源五「思ひがけない所へ小万…おれをば、術ない目にあわせた。」小万「オ、嬉しや。わたしも年寄りの真似で、しんどうてならぬわいなア。」（→遊女、同）
- ・源五「こりゃ内から、爛をして来たか。」弥「イ、工冷でござります。略。わたくしが精分な強いので、爛ができたのでござりませう。」源五「道理でをかしい歩きやうだと思つた。おぬしの持参で、まづ酒は出来たが、肴はどこから出やうぞ。」（→町人、117）
- ・宅左「まことにその節は、手前もその席にをり合わせながら、千太郎のお言葉をかつて、三五兵衛が傍若無人、なんと申さう言葉も無い仕儀、それぞれゆゑそのまま打ち絶えましてござる。その段は御免下されい。」源五「これは御挨拶、忝なう存じます。」（→武士、110）

以上の例から、武士詞の特徴を挙げると以下になる。

- ・人称代名詞：第一人称「拙者・おれ」、第二人称「手前・おぬし」などの類もある。
- ・丁寧語：「～マス」の意に当たる（マスル）→「存

じまする」

- ・謙讓語：「～イタス」の意にあたる（モウス）→「お暇申ませう」「お聞かせ申し」「お尋ね申さう」
- ・尊敬語：「オ～ナサレイ/下サレイ」→「お越し下され」「御免下されい」
- ・形式名詞：「仕儀」（結果・次第）・「段」（こと）
- ・特殊語：「然らば」そうであるならば

さらに、話す相手の身分によって言葉の使い分けが見られる。例文からは、同階級の武士に対する言葉遣いの方が、遊女や町人に対する言葉遣いより丁寧であることがわかる。具体的には、「拙者・手前↔おれ・お主」、「存じまする・申さう・お言葉・ご挨拶↔思うた・来たか・出やうぞ」などが挙げられる。

6. まとめ

以上、江戸時代の言葉は、階級や年齢などの身分的な要因、男女の違いによる要因、さらには話す相手や場面などの個別的な要因が、複雑に関連して成立していることが確認できた。江戸語のバリエーションが豊富な理由はここにある。また、もてなしの文化の一つとして考えられる遊郭には、遊女独特の言葉である遊里語が存在し、その遊里語はお客を目上の者として応対するという重要な原理が反映されていることがわかった。

主な参考文献

- ・近藤豊勝（1993）『江戸遊里女論集』新典社刊行
- ・佐藤喜代治他（1971）『講座国語史・語彙史』3巻 大修館書店
- ・佐藤喜代治編（2007）『日本語学研究辞典』明治書院
- ・杉本つとむ（1985）『あそばせとアリンと江戸の女ことば』創拓社
- ・真下三郎（1966）『遊里語の研究』東京堂出版
- ・松村明（1957）『江戸語東京語の研究』東京堂出版
- ・国語学会編（1980）『国語学大辞典』東京堂出版